

47 高松凌雲（一八三六～一九一六）と フランス

小林 晶

高松凌雲は慶応三年（一八六七年、以下西暦）パリで開催された万国博覧会に、幕府派遣使節団の一員として参加した。彼は幕府の奥詰医師であり、使節団の健康管理を管理すること以外に、フランスの医学を見聞しようとの意図を持っていた。当時わが国では、フランス医学についてはパレの外科学が既に知られていたとはいえ、関心は薄かった。

使節団は横浜出発後四八日目の一八六七年四月三日マルセーユに到着、同月二一日パリに入った。第一夜をル・グランホテル・ド・パリで過ごし、その壮大華麗さに驚いている。彼の言を借りれば「極楽浄土は西の仏の国に在りと聞けるが、是即ち仏国なりとて一笑を發したり」とある。

折りからナポレオン三世下の第二帝政時代で、爛熟し

た文化の最盛期であった。代表の徳川昭武に随行して多数の公式行事に出席、多忙を極めたが、使節団は経済的理由でペルグレーズ街五三番地に移動した。凌雲は使節団のヨーロッパ歴訪に約二か月半随行した。中途パリに一旦帰着した二一月一八日に正式な随員としての任を解かれ、サン・フェルディナン街一〇番地で木村宗三（砲術勉強のため随行）と二人で暮らすようになるが、昭武のイギリス訪問に再び同行することになる。結局、パリで目的の医学の勉強を自由に開始できたのは、明けて一八六八年一月のことであった。

彼は勉強の場としてパリのオテル・デイウを選んだ。オテル・デイウの起源は古く六五〇年まで遡れるが、元来病人以外に浮浪者、老人、身障者、妊婦、捨て子などを收容し、宗教的慈善の色彩が強かった。病人のみを收容するようになったのは、一六五六年ルイ一四世の勅令以来である。以後、パリはおろかフランスでの中心病院として発展してゆく。市内の各所の病院も整備されていたが、慈善の精神はオテル・デイウには常に存在した。建築、内容についても火事、戦乱により幾多の変遷

を経て、現在の位置に定着するのは一八七七年である。凌雲が勉強した頃は一八六五年に始まった新築移転工事で混乱していた。しかし、彼の帰国後の人生を考えれば、この病院を選んだのは、きわめて正しい選択であったと考えられる。

オテル・デイウ内での凌雲の詳細な日常生活、行動などについての情報はきわめて乏しい。判明しているのは、下宿から病院間までの五キロを徒歩で通学していること、外科に興味を持ち麻酔、消毒を会得し帰国後応用していること、外科器械を持ち帰り利用していること、五月中旬まで約四か月間通学したことなどである。

後年書かれた「刀圭新報」(明治四四年)、「高松凌雲翁経歴談」(明治四五年)には「(慶応三年十月)二十四日(一八六七年一月一日)、一行巴里ニ帰着シテ、既ニ歐洲巡回ノ事ハ終ハリタレバ、予ハ公子ノ付属ヲ解カル因テ、木村宗三ト共ニ下宿ヲ求メテ専ラ医学ニ従事スル事トハ成リタリ、木村ハ砲兵学ヲ修ム、予ハ「ホテルヂユム」ト云ウ病院ニ通学ス、宿所ニハ毎日二時間教師ヲ雇フテ語学ヲ勉強シタリ、是予ガ尤モ大得意ノ時ナリ

シ。」とだけ記載している。

演者はパリの福祉事業局、国立医学図書館、歴史博物館などを訪問し、識者にも調査を依頼したが、凌雲の詳細な院内での足跡を辿ることは出来なかった。この原因の一つはオテル・デイウに学ぶに際して紹介者が不明なこと、前述のように新旧取り混ぜて建築中であり、数年後の普仏戦争、パリ・コミューンなどで戦傷者の治療の中心としての役割などが記録を困難にし、散逸したものと考えられる。彼がオテル・デイウで学んだことは、高度に発達した設備、技術を持った医学と博愛精神であった。前者は戊辰戦争での医療や仏医学書の翻訳出版として遺憾無く生かされ、後者は「同愛社」として結実する。義に生きた凌雲の一生には、常にフランスのエスプリが存在したのである。

(福岡整形外科病院)